

## 「J-Life」：人生の物語に私たちが見出す意味

えんどうゆうこ， 鄭京姫， 福村真紀子， ロマン・パシュカ， 佐藤貴仁， 佐藤正則（以上，  
早稲田大学）

### 1. はじめに

ここ数年，日本語教育においてライフストーリーやライフヒストリーなどのナラティブ研究が注目を集めている。人の人生や生涯を聴き，それを物語として構築していくことは，語り手と聴き手の共同の行為であることはよく指摘されることだが，実際は聴き手である研究者がデータを分析し解釈を進める過程で，研究方法について苦悩することが多いように思われる。しかし，研究の方法ばかりに気を取られると，なぜ自分は人の人生・生涯（「Life」）を研究するのかという肝心な意識が背景に追いやられてしまう可能性がある。

本セッションのメンバーは，ライフストーリー／ライフヒストリーの研究手法における課題や解決についての討論からは多少の距離を置き，その語りの中や語りの場に現れる「Life」を模索し接近する時空間を創ろうと，「J-life」を組織した。

「J-life」の「J」とは日本語を学ぶ人，日本語を教える人，日本語・日本社会で生きる人などを意味する。そしてその「J」にかかわる人たちの「Life」に関心を持ち，研究と実践を行う人の集まりが「J-life<sup>1</sup>」である。私たちは「J-life」で，人の「Life」へ興味を持つこと，その語りを聞くこと，そして記すことが，ことばを教え，ことばで生きる人々においてなぜ必要なのか，どのような意味があるかを問い直し，発信していきたいと考えている。

### 2. パネルセッションの目的

本パネルの目的は，人生の物語やその語りに寄り添うことで見出される意味について問うことである。

本パネルでは「Life」に関わる2つの語りをもとに発題する。まず，鄭の発題では，人

---

1 「J-Life」は，月に一度の月例会と3カ月に1回のSessionを開催，さらに年に一度，WEB版Report（論集）の刊行を予定している。お問い合わせはJ-Life@list.waseda.jpまで。

生を語る語り手にとって、その語りにはどんな意味があるか、そしてそれが鄭自身にどのような影響を与えていたかを述べる。次に、佐藤の発題では、聴き手が人生の物語に耳を傾けることの意義と、聴き手と語り手の相互の変化について考える。

以上の2つの発題を受け、コメンテーターが意見を述べ、その次に会場とパネリスト、コメンテーターとの対話を行うことで、人生の物語やその語りに見出される意味について考えていく。

### 3. パネルセッションの構成

本パネルは以下のような構成で進める予定である。

|   | 内容                             | 担当者                         |
|---|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 | はじめに<br>(問題意識, 目的, セッション概要の説明) | 福村真紀子                       |
| 2 | 発題 (1) 「エピファニー」; 自分の物語を書き換える経験 | 鄭京姫                         |
|   | 発題 (2) 「人生の物語に耳を傾ける意味」         | 佐藤貴仁                        |
| 3 | コメンテーターによるコメント, 発題者との意見交換      | えんどうゆうこ<br>佐藤正則<br>ロマン・パシュカ |
| 4 | フロアとのディスカッション                  | 全員                          |
| 5 | まとめ                            | 福村真紀子                       |

### 4. 発題

#### (1) 「エピファニー」; 自分の物語を書き換える経験

デンジン (1992)<sup>2</sup>は、人生において重要な転換のきっかけとして「エピファニー」という言葉で自分自身の運命を変えたことを説明している。私にとって「日本語人生」を語る場は「エピファニー」、そのものであった。

私は 2004 年度よりライフに関わる研究を行っている。研究方法を模索した日々に出会ったライフヒストリー法に関して、当時は「これが研究なのか」という質問が多く、日本語教育であまりなじみのない「研究方法」で研究をする不安とともに、「研究とはかく

2 デンジン, N. K. (1992) 『エピファニーの社会学—解釈的相互作用編の核心』 (関西現象学的社会学研究会 (編訳)), マクロウヒル.

あるべき」といったまなざしに苦しんだのも事実である。だが、日本語学習者の「日本語人生」に出会ってきた私は、語りから得られる「方法」が重要でないことに気付く。そしてそれは、私の中で彼／彼女らが語ることをデータとしてまとめてはいけないという「人間」を研究する者としての立場につながった。さらに、「日本語人生」を聴くこと、そして研究をすること、その物語を生きること、それらがすべてつながっていたことを私は「日本語人生」を語るその場を通じて感じていた。では、「日本語人生」を語るその「場」は、私に、そして語り手にとってどういう場であったのだろうか。インタビューという「場」で語ることは、これまでは語ることが出来なかった、あるいは語ることがなかったことを語ることによって自分を相対化し、「語り手個人のレベルではインタビューであらたな自己や人生が創造される事態につながるかもしれない」（桜井 2002, p. 245<sup>3</sup>）と言われているが、「日本語人生」を語る場はまさにそうであったのであろう。例えば、語り手の BLUE さんは「日本語人生」を語ることを通し、初めて「自分の日本語」について考えたと言った。「日本語」は一度も自分のものであると考えたことがない。しかしその「日本語」を「自分」が語る機会を得た。日本語はまだ下手であるが、その経験を通し、自分が持っている「日本語」とその学習を振り返ることができた。彼が「日本語」を学ぼうとした動機は、純粹に〈のりピー語〉を勉強したかったからである。しかし、その〈のりピー語〉を勉強しようとしたときには考えてなかったが、〈日本人側になりたい〉、〈バカみたいな日本語は話したくない〉と思うようになった。場面と状況に合う日本語にこだわり、その表現を身に付けることでコミュニケーションが円滑にできると考えた。彼が言う円滑なコミュニケーションとは日本語教育で期待していたコミュニケーション能力、まさにその姿であった。しかし、自分の「日本語人生」を語り、そして「日本語」を振り返り、その〈のりピー語〉が自分の家族に重要であったことを思い出し、思い起こされ、そして自分にとって意味のある言葉とは何かを考えるに至ったのである。

〈ガイコクジン〉というまなざしに差別を感じていたモンゴルからのバートルさんは自分の名前で〈ガイコクジン〉が特定されると、時々、自分の名前を拒否していた。しかし、自分の中にあるもやもやとした疑問を考え、外国人として生きることではなく、バートルという一人の人として生きていきたいという思いをインタビューの後、Eメールでその感想を送ってくれた。バートルさん夫妻には可愛い赤ちゃんが産まれた。赤ちゃんの名前は「バイラ」ちゃん、で、「喜び」という意味だそうだ。

---

3 桜井厚（2002）『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房。

「日本語人生」を語る彼/彼女らと私は語り合い、理解し合うことによって人と人の信頼関係が結ばれたのだと考える。それは、お互いの家族、日本語、夢、友人、生活を語り、共有し合っていく中で可能であった。「日本語人生」を語るインタビューも、そこで彼/彼女らと私は、お互いが語ることを通じて、自分のことばで自分を捉え直してきたのかもしれない。また、その場で語られた日本語は、「自分のことば」そのものであった。「日本語人生」を語るその場を居心地良いと感じ、また、インタビューが終わりお礼を言われたが、それは、彼らが自分の感情や意見などが意味のある全体へと組み立てられる経験になったからではなかろうか。「日本語人生」という物語は日本語が単なる外国語としての概念でもなく、道具でもなく、一人ひとりを支え、可能性を見出し、生き方につながることであることが明らかになった。

私と彼/彼女らは自分の日本語で「物語」を語った。物語を生きる「わたし」に「ことば」がなぜ必要であるのか。ことばを獲得する意味とは何か。それらが「日本語人生」という物語によって再構成されたのである。

## (2) 人生の物語に耳を傾ける意味

現在の研究フィールドである台湾の高齢者デイケア施設「玉蘭荘」との出会いは 2008 年に遡る。きっかけは、当時の勤務先で機関誌の編集を担当した際、玉蘭荘を取材したことによる。その後、研究調査を目的として 2012 年 3 月に再訪し、施設の会員にその人生の語りを聴き始め、関わりを持つようになってから 2 年が経過した。本発表では、機関誌の取材時にも話を聴き、かつ 2 年前から継続して 4 回のインタビューを行った李さんの事例を取り上げ、語りを通じた彼のこの 2 年間の変化から、人生の物語に耳を傾けることの意味について考えてみたいと思う。

李さんは 1928 年生まれの台湾人男性である。当時、台湾は日本の統治下であったことにより、彼は「日本人」として日本語による初等教育段階を修了している。2012 年に再訪し、1 回目にインタビューした際には、以前と変わらず穏やかな印象であったが、決して積極的なタイプではなく、また、活動中には、時として自分の世界に入り込むなど、不安定な様子を見せることもあった。

現在の会員の多くは、未成年の多感な時期に、「日本人」としての人生に突如終止符を打たれた経験を持つ。それは、教師をはじめとした身近な日本人が「ある日突然終戦とともに、パツといなくなっちゃった訳でしょ。帰っちゃった訳でしょ。理解できないでしょ。だから捨てたと思われた、そう思った人も結構いるんです」と、玉蘭荘のスタッフである A さんが語るように、撤退は終戦によるものだから仕方がないと理性では理解していて

も、感情的には「捨てられた」体験として、心に残っている人も多いようである。よって、日本人に対して複雑な心理を抱いている場合も多々あり、それは李さんも例外ではない。

しかし、そんな彼の変化の予兆を伝えてくれたのも A さんであった。それは、1 回目のインタビューを元に語りをまとめ、シンポジウムで発表する際の予稿集原稿を確認してもらった時の様子に感じ取ることができる。以下は A さんからのメッセージの一部である。

実は、今日お二人に確認して頂きました。（中略）すぐに読まれ、変更箇所を指摘され、内容はすべて自分が語った通りだと言われていました。僕は政治的なことは一切触れていないので...と、特には問題ない様子でした。（2012 年 9 月 7 日付メール）

「お二人」というのは、李さん以外にもう一人を取り上げたからである。その人は、まとめた文章を読むと困惑した表情で、心配そうな反応を見せたという。それは、本音を語る事が極端に恐れられていた時代を過ごしてきたという歴史的経緯から、自分のことを伝え、公表するということが、想像以上に負担が大きいことが窺える。だが、李さんの様子を伝える文章からは、それを乗り越える覚悟のようなものを感じ取ることができる。2 回目のインタビューを挟み、その後、A さんに予稿集を論文化した際の際の原稿を送ったところ、次のような返事（一部抜粋）をもらった。

今回の事例に、このお二人を選択なさったのは、まさにピットリだと思います。李さんは、この事を通してかなり解放されたのでは？と感じます。（2012 年 10 月 27 日付メール）

以下は、最終稿の確認時の李さんの様子を、A さんが伝えてくれたもの（一部抜粋）である。その際、李さんは自分の体験を大勢の前で自ら話してもいいと言い始めたという。

李さんは、ご確認されて、OK との事。また、もし佐藤さんに要請されれば、旅行のついでに、皆様の前で自分の正直な気持ちを直接お伝えしてもいいと、おっしゃっておられますよ。

（2013 年 1 月 28 日付メール）

その後の A さんとのやり取りが以下に続いているが、内容は研究を通した彼の変化を示している。ここに、誰かの人生に耳を傾けることが単なる「聴き取り」ではなく、また、その内容を起こすことが「音声の文字データ化」に留まらないことが窺えるだろう。

先週、李さんは、ただ正直な気持ちをお伝えしたと言われていました。佐藤さんを信頼されておられることを強く感じました。

(中略) 実は、佐藤さんがこの論文で関わって下さってから、李さんはかなり変わってこられた様に感じております。心が解放され明るくなられ、益々お元気になってこられました。是非、日本行きを実現して差し上げて頂きたいです。彼のためにもプラスになると思いますので。 (2013年2月5日付メール)

何が李さんに明るさや澁澁さをもたらし、その変化を私がどのように捉えたのか。当日の発表では両者の語りも交えながら、研究を通した相互行為がどのように働き、互いに変化を及ぼしていったのかを考えることで、人生の物語に耳を傾けることの意味を問いたい。

## 5. まとめ——セッションのディスカッションに向けて

鄭と佐藤は、それぞれに、なぜ自らが人の「Life」に向き合い、研究をしているのかを述べる。両者に共通していることは、その研究方法の如何を問うことではなく、その研究にどのような意味があるのかを問うことの必要性を示すことである。

両者の事例からは、語る者と、その語りを聴く者との間の信頼関係の深さが浮かび上がってくる。そして、その信頼関係は、語る者と聴く者双方の生き方に気づきや変容をもたらすと考えられる。

「Life」を研究することが、その研究に関わる者の生き方を変えるものであるならば、日本語教育学の文脈で「Life」の研究をすることは、日本語教育の世界に、一体どのような役割があり、どのような意味があるのだろうか。

鄭と佐藤は自身の「Life」研究の意味を、飾ることなく素直に語る。人の「Life」についての語りを聴き、その「Life」を究める、人生の物語の研究にはどういう意味があるのだろうか。本パネルを聴く人たちと共に、有意義な議論ができることを期待したい。

## 6. パネリストの J-Life 的紹介

### ◆えんどうゆうこ

日本語教育の世界に入ってから今日まで迷走し続けているが、最近、自分のしていることは教育より福祉に近いのではないかと考える。でも実践は大好き。LS 関連では「自分史を書く」実践を行っている。

### ◆鄭京姫

韓国・ソウル生まれ。2004 年度より「日本語人生」という物語を聴き、論文・発表などを通じて語っている。2012 年度早稲田大学日本語教育研究科博士課程修了。博士（日本語教育学）。著書で『私はどのような教育実践をめざすのか』（細川英雄共著・春風社）がある。

◆福村真紀子

1995 年日本語教師人生開始。子育て中の母親の孤立問題に直面する度、自身の体験が重なり、対話の必然性を感じる。2010 年より東京都日野市で親子日本語サークル「にほんごあいあい」を主催。（<http://nihongoaii.blog129.fc2.com/>）自称、地域日本語活動家。

◆ロマン・パシュカ

2001 年、ブカレスト大学にて日本語教師人生スタート。日本語教育の世界へ、文学研究の世界から入ってきた。博士（文献学）。2 年前から、ルーマニア人日本語教師のライフストーリーを聴いている。

◆佐藤貴仁

青年海外協力隊員としてカンボジアに派遣されたのが、日本語教育人生のスタート。以降、シンガポール、トンガ、台湾と渡り歩く。玉蘭荘との出会いが大きな転機となり、第二の人生を歩みつつある。

◆佐藤正則

劇団主宰、塾講師を経て日本語教育の道に進む。数年前から留学生や元留学生のライフストーリーを聴いている。浜っ子。ことばの市民塾始動直前。